

巻頭言

1992年に発足した日本惑星科学会は、今年で四半世紀という区切りの年を迎える。発足当時の目標であった日本発の惑星探査を実現するため、日本各地で多くの人々が様々な形で尽力してきた。その結果、小惑星探査に月探査、そして金星探査が実現している。さらに、現在も小惑星探査が運用中であり、ESAとの共同ミッションである水星探査は打ち上げ間近となっている。このように幾つもの惑星探査が実現したのは、惑星探査の成功を望む理工学コミュニティの力である。惑星科学会の会員は、このようなコミュニティの一員として惑星探査の実現に寄与できたことに誇りを持っていると思う。

一方、その過程で我々の学会は、惑星探査を実現することの難しさを知り、また、成功した時の喜びを知った。しかしながら、日本の宇宙開発という荒海の中で、1つの成功を次に繋げることや1つの失敗から回復することの難しさにも直面し、四半世紀前には考えられないほど多くの経験をしてきた。そして、その経験を礎にして、今、新たなミッションの実現に多くの人達が参加している。

学会の発足当時、惑星探査はこの学会の活動の中心にはなく、それはアメリカやヨーロッパからもたらされる遠い存在だった。それが、今では惑星探査は学会の身近にあり、毎週のようにどこかで惑星探査のミーティングや研究会が開かれている。惑星探査は、惑星形成論を実証するための手段であり、そのサンプルリターンにより原始太陽系星雲の謎を解き明かす切り札になり、地球という生命を育む惑星を理解するためには無くてはならない存在だと、多くの人々が実感できるようになった。

このように今日の日本惑星科学会では、惑星探査が学会活動の中心の1つとして大きな位置を占めている。しかしながら、運営組織は25年前の発足当時からはほぼ変わっておらず、運営の実体と現在の組織に歪みが生じているように思える。探査を実現する母体の一つとして、この学会はその組織も現状に合わせて作り替えて行くべきであろう。14期では、この四半世紀で学会が蓄積した惑星探査に関する経験が次世代に受け継がれ、さらに、探査に携わる多くの人達が共同作業できる環境を構築することを目指したい。

荒川 政彦(神戸大学大学院理学研究科)